

## ハイデルベルク信仰問答より

問 109 この戒めにおいて、神は姦淫という大きな罪以外は、何も禁じていないのですか。

答え 私の身も魂も聖霊の宮でありますから、私たちが純潔であり、聖く守ることは神の御心であります。ですから、神は一切の不貞行為、仕草、言葉、思い、欲望および他人をそれらのことにかき立てることは、どのようなことでも禁じているのであります。

〔別訳〕

答え わたしたちの体と魂とは共に聖霊の宮です。ですから、この方はわたしたちがそれらの二つを、清く聖なるものとして保つことを望んでおられます。それゆえ、あらゆるみだらな行い、態度、言葉、思い、欲望、またおよそ人をそれらに誘うおそれのある事柄を禁じておられるのです。

第七戒 あなたは姦淫してはいけない。(出 20:14)

今日は第七戒の内容にまつわる二回目の学びとなりますが、問 108 では全体として「行為」としての不品行と姦淫について考えました。問 109 ではキリスト者の精神面と周辺行動における純潔性について考えることが求められています。「この戒めにおいて、神は姦淫という大きな罪以外は、何も禁じていないのですか」という問いには、「もちろんそれだけに留まるものではありません」という暗黙の答えが含まれています。

前提として述べられているのが、キリスト者の「体と魂」が「聖霊の宮」であるということです。「体と魂」という表現は、物質的なものと非物質的なものを分離して捉える二元論的な発想と誤解される可能性があります。聖書は人の救いを全人的なものとして表しています。つまり、単に魂だけが救われるのではなく肉体も丸ごと主のものとされるのです。それが、救いにあずかった者がどうして自分のからだを大切にしなければならないかの理由です。私たちの肉体が聖なるキリストのからだの一部であるから、それにふさわしく管理し、汚すことのないようにしなければならないのです。

答えの中で、禁じられていることとして「一切の不貞行為、仕草、言葉、思い、欲望および他人をそれらのことにかき立てること」が挙げられています。ここで思い起こすのは主イエスの教えでしょう。

あなたがたも聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、私は言うておく。情欲を抱いて女を見る者は誰でも、すでに心の中で姦淫を犯したのである。(マタイ 5:27-28)

この高い基準にたじろがぬ者、心の中を照らされるのに恐れを覚えない人はいないはず。視覚的な誘惑から身を守るためには、そのようなものが視界に入りにくい環境を意識的に作り続ける必要が

ありますが、そのような要素はそこかしこに転がっています。ある牧師は、男性に向けてこの主イエスの教えを伝えると同時に、女性にも「男性にとって誘惑になる格好することも同様です」と教えていると言っていました。双方の心がけが求められている教えであることは間違いないでしょう。

但し、この教えを「律法」として行なうところには必ず挫折が伴うため、私たちはより根本的な部分に目を向けて生きている必要があるのです。それは、まず「山上の説教」という教えそのものの性質から、主イエスが人に「ああせよ、こうせよ」と「doing」を押しつけているのではなく、「キリスト者とはそういう存在なのだ」という「being」を教えておられるということです。つまり、キリスト者は不品行や姦淫の支配から贖われ自由にされたということであり、もはや欲望の奴隷ではないということ。そして、私たちが見るべきところは常に「聖なるキリスト」であり、自分の内に聖霊が内在されているという認識です。欲望と戦おうとしても、人は決してそれに打ち勝つことはできません。むしろ、見るべきところを変える、いえ、見ているところが決定的に変えられたことを認識し続けるべきなのです。

私たちが全人的に贖われ神のものとされたとき、私たちの異性に対する態度も変えられていきます。配偶者を悲しませる行ないを離れ、他の異性とは誠実に一線を引き、兄弟姉妹としての純粋な見方／関わり方を志すようになるでしょう。目の前にいる兄弟姉妹に対し、どのような態度が誠実であるかを、主に祈り求めながら歩んでいきたいと思えます。